09

飯田産業 合資会社

常に新しさを体現できる機械を求める

エアージェット織機

工場内風景

工場外景

事業内容 貪欲な技術更新

昭和23年に設立された同社の主力は側生地織物である。布団のカバーやシーツなどの寝装織物の製造を得意としている。羽毛布団側地の国内生産でのシェアと技術はトップレベルだ。羽毛布団側地のタテ糸密度がインチ間250本、ヨコ糸250本の合計500本の製織技術を確立している。

また近年ではユニフォームやワーキングウエア向けにも製造している。さらに産業資材向けには自動車用サイドエアーバッグの補助用の固定布と医療用テーピング基布の生産も順調に推移している。

機械に関しても定期的に新しいものを取り入れている。昭和58年にエアージェット織機、平成9年に210cm電子ドビー織機、平成10年に280cm超広巾電子ドビー織機を導入した。平成20年には織機だけでなく超広幅対応大径ロール巻検反機を導入した。

補助事業 あえて遅く織る

羽毛布団の羽毛価格が世界的に高騰している中、今後は羽毛布団側地によりいっそうの高級感が求められると予想される。そこで、さまざまな原糸を使い、新しい織物作りを目指すことを考えた。

同社の主力である羽毛布団の側生地織物のニーズは、超極細綿糸や機能性素材を用いた糸を使用するなど多様性が増している。一方で、工業用ろ過布など専門性の高い商品開発も求められてきている。これらに十分対応できる織物を製造するために適応範囲の広いエアージェット織機を導入することにした。

エアージェット織機は高速で織れることが大きなメリットである。しかし、今回の導入意図はそこではなく、「速く織る機械で遅く織る」ことだ。超細番手に対応できる最新織機であえて回転数を落とし、丁寧に織ることで、より高品質な織物を製造することが可能となる。丁寧に織ることと納期に間に合わせることを両立させるため、中小企業庁の「ものづくり補助金」制度では3台のエアージェット織機を導入した。

具体的成果 より丁寧に、より速く

補助事業によるエアージェット織機の導入成果としては、超極細綿糸をタテ糸、ヨコ糸に用いた羽毛布団の側地織物の生産を開始した。エアー圧力が1分間に370回転での稼働率が、旧織機では65―70％だが、新導入織機では80％の稼働率が実現できた。

また、主力取引先会社の直営織布工場の閉鎖に伴い、「飯田産業」への供給依頼が多くなることが予想される。そこで、超極細、高密度羽毛布団を製織する際の織機回転数370回で、80％の安定稼働による1日30mの生産が実現したことで、一回の受注量5，000mの超極細高密度織物の受注を3台で織ることにより短納期で受注することができるようになった。これにより羽毛布団側地の製織に関して優位性を持つことができた。

さらに、インバウンドの特注に対応できる体制も整った。温感貼り薬用の基布などの資材織物については旧機械比1．4倍の縫い上がりが可能となった。これにより、短納期対応と人件費のコストダウンを図ることができた。

今後の戦略 積極的かつ計画的な設備投資

新興国でも人件費が高騰している中、日本で織布業を営むには人手のかからない機械を導入できるかどうかが勝負となる。同社は定期的に新しい機械を導入し、工場内の機械の「若さ」を一定に保っている。古い機械を使い続ける同業者が多い中、同社は計画的に機械を更新しており、今後も同様な姿勢で臨む。国内では高級品志向に対応できる高付加価値商品を生産できることが必須である。コストを減らし、かつ高品質な商品が提供できるように織機だけでなく、織細な織物でも検品できるロール巻き検反機を導入している。紡績会社は品質の安定を求めて新しい機械を導入している工場を相手にしたいという考えもあることから、この点でも商機を捉えることができる。

また、これからさらに需要が増えると予想されるインバウンド向け商品に対応できるようにしていく。今後も新しい織機を導入し、大量生産できる体制を図っていく。

飯田産業 合資会社

代表社員　飯田 貴司夫

〒594-1156　大阪府和泉市内田町2−6−60

TEL. 0725−54−0480

FAX. 0725−53−3648

資本金／35，000千円

従業員／25名

短納期　企画力　小ロットOK　オンリーワン技術

オンリーワンの機屋を目指す

代表社員 **飯田 貴司夫**

泉州地域においてほかには無い織物工場です。例えば、カム織機を導入する工場が多い中、当社はほとんどドビー織機です。また2，000―3，000mの長尺物も対応可能です。定期的に最新の機械を導入して、他社にはできない織物を作ります。

http://www.venture-net.jp/iidasangyo/

取材を終えて

機械の特性を最大限に生かす

同社は工場の機械全般の「若さ」に強いこだわりを持っている。織機の歴史は技術革新の歴史でもあり、新しくできた織機には当然今までに無い機能がある。そういった機械の特性を積極的に受け入れ、新たな高付加価値製品を生産する同社の姿勢は日本産業全般に求められる点ではないか。